



「大橋集木園奇品」とし、「大橋 きんし南天」、「大橋白斑かなあおヒバ」、「あいの斑 ごま葉楨」を記す。

オランダ本国焼と称す陶磁の盆器は、当然長崎からの舶来品である。

大橋某は、唐物(夏物)を好み、安南、阿蘭陀、ルソン等を集め、国内では西肥上等を愛したと記される。

この時代、奇樹奇草が「金生樹(金の生る木)」として持て囃されるにつれて、鉢の方も技巧を尽くしたものが多く現れた。

形状、文様が多種、多様となり、尾張、伊万里、有田など、各地の逸品が江戸に集まっている。

特に染付けが多様され、今日、多くの染付鉢が残されている。

また、赤絵の薩摩焼は、貴重品として皇室の御物として引き継がれた。

集木園のその後は知り得ない。(2009.11.23)

Copyright (C)2009 増田信敬 (masuda nobutaka) All rights reserved

出典 「草木奇品家雅見」 文政10年(1827年) 増田繁亭金太 著 架蔵本

(参考文献)

- ・「「草木奇品家雅見」解説」昭和51年 監修者 岩佐亮二、執筆者 塚本洋太郎、前島康彦、笠原基知治、横井政人、広瀬嘉道、 芦田潔 青青堂出版
- ・「盆栽文化史」昭和51年 岩佐亮二 八坂書房

<http://soumokukihinkagami.com/>